



『世俗諺文』の異本をめぐって

荘, 隆福

(Citation)

国文学研究ノート, 19:45-48

(Issue Date)

1986-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012256>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012256>



『世俗諺文』の異本をめぐって

莊 隆 福

日本の最古の諺の本といわれる『世俗諺文』は現在、上巻の二百五十三項目しか存在していない。統群書類従巻第八百八十五に所収の『世俗諺文』の序文に述べられた「六百卅一章勸成三卷」の文面から判断すれば、元来、上・中・下三巻であったものが中・下二巻が散佚して、上巻しか残っていないと見られる。

現在、『世俗諺文』は京都市教王護國寺なる観智院所蔵のいわゆる観智院本と統群書類従巻第八百八十五に収められているものが知られている。観智院本に対する山田孝雄氏の解説に「本書はかくの闕本たりといへども実に現今唯一の伝本にして、ただ他に古写本の伝ふるを知らず、統群書類従に収むるものも亦この本の伝写本によれるものなりとす」という意見が見られる。しかし、伝写本と言っても、統群書類従と観智院本を合わせて細統すれば、いくつかの相違点が指摘できるから、統群書類従が直接、観智院本から抄するものではないと考えられる。少なくとも、観智院本と統群書類従の間に、また、別の伝写本が介在していたと言えよう。その証拠は次のとおりである。

(一) 観智院本の冒頭にある約三十項目の補足と思える条項を、

統群書類従は収めていない。序文にも述べられた「此外漏略追将編録、後之見者亦羨裨補」のように、上巻の前にある約三十項目の条項は、補足と思えるものに該当するにも拘らず、統群書類従は、これを取り入れなかった。それに、観智院本の奥書の「右両三卷之書乎今見上卷而已後棄得全本者補書寫出損修復了」という文面も統群書類従には欠落している。

(二) 統群書類従には返点を付けていないのに対して、観智院本には、誤りが若干あるとはいえ、全篇、返点をきちんと付けている。当然、統群書類従は返点を付していないからと言って、観智院本によるものではないと断言してはならない。しかし、統群書類従の編者が返点を付している観智院本によるならば、次のような誤りを犯さないだろうと思われる。

「舐贖」という項目に、「朝野僉載云老牛舐贖老牛思□□」とあり、一字分が空白のままになっている。ところが、観智院本には、この空白部分に「頼」という字が入っており、「モノウキコトヲ」と振り仮名が付されている。「頼」はこの傍訓から判断すると、正しくは「懶」である。だから、観智院

本の振り仮名を見ていたら、統群書類従の編者が「頼」の意味がわからないために、空白にしたということはあり得ない。

「文士数奇詩人薄命」という項目の、「白氏洛中集序云、古人明言曰、文士数奇詩人薄命、誠哉斯言。」の「明言」は「有言」の誤りであるが、若し、統群書類従が観智院本の「有言」を根拠とすれば、こんな誤りは生じないだろうと考えられる。統群書類従の「一人向壁滿座不論」という項目の、「壁、一堂上今有滿堂飲酒、有一人独業然向隅泣、則一堂人皆不樂也」の最初の一字の「壁」という字は「譬」の誤りである。観智院本を見ると、この字のところを「譬」とはっきり読み取れるのである。また、統群書類従の「孔子仆」の項に、「及其如棟湯」が有り、その「棟湯」は明らかに「探湯」の誤りである。観智院本の「如^{シヤ}探^{タツ}湯」を見たならば、このような誤りは避けられたはずである。また、統群書類従の「折桂枝」の項目の、「崑崙之行玉」の「行玉」は「片玉」の誤りである。統群書類従の「口筆」の項目の「徙^{ヒツ}都之功」は「徙都之功」の誤りである。勿論、異体字や古体字の問題が絡んで来るかも知れないが、しかし、送り仮名の付してある観智院本を頼りにすれば、統群書類従の編者がこんな間違いは避けられるだろうと思わざるを得ない。

(三) 「曰ク」や「云ク」という常出の字の不一致の例と一致する例が並存する。

統群書類従 観智院本

神不享非禮	曰	云
師子身中虫自食師子	曰	云
有靜臣	曰	云
君師無私諱	曰	云
堯子不堯	曰	云
溥天之下莫非王土	曰	云
父母存不称老	曰	云
内拳不失其子	曰	云
安不忘危	曰	云
孔子仆	曰	云
一人向壁滿座不論	曰	云
獲麟	曰	云
一致する例は、		
祭如在	曰	曰
大地為的	云	云
如弘頭火	云	云
佛受猿供養	云	云
蟲催袴燒	云	云
天無二日	曰	曰

統群書類従 観智院本

王事靡監	云	云
天子無戲言	云	云
山呼萬歲	云	云
四海為家	云	云
守在海外	云	云

(以下略)

若し、「曰」を「云」と書くのが統群書類従の編者の癖と言うならば、話はそれまでであるけれども、しかし、実際には、右表の如く、観智院本と統群書類従とで、「曰」と「云」が一致する例と一致しない例とが有るから、「曰」を「云」と改めることは、決して統群書類従の編者の癖ではないと分る。そうすると、統群書類従の拠った本が観智院本ではないだろうとしか考えられない。

(四) 統群書類従に解説できない箇所が、観智院本では、はっきり判読できる。譬えば

「佛受猿供養」という項目(統群書類従)の「阿含經云、世尊一時遊具舍離大林之中。爾時諸比丘韓鉢露地時。世尊鉢亦在其中。有一猿猴持佛鉢去。諸比丘訶恐破佛鉢・佛告諸比丘上々莫訶不破鉢也。時彼獼猴持佛鉢去。至一娑羅樹。徐々

上樹。於娑羅樹上取密滿鉢。徐々下樹、還詣佛所。即以密鉢奉上世尊。世尊不受。時彼獼猴却在一面。取櫬去。虫既去。虫已還上佛。佛復不受。獼猴復却在於一面取水著密中。□□□□獼猴見佛取密鉢。已歡喜。□□□□□□□□施而去。これを観智院本と照合して読めば、□の箇所は、「持還上佛、世尊便受」。「踊躍却行拈舞迴」とはつきりして来るのである。なお、「蝨催袴燒」の項目で、統群書類従の「爾

□□蚤者今提婆達多是」の箇所は観智院本によると「爾時土蚤者今提婆達多是」とはつきり判読できる。「王事靡堅」の項目で、統群書類従が「王事元不□□我□□力勤勞」というところを、観智院本は、「王事元不堅□我当尽力勤勞」とする。又、「糟糠」の項目で、統群書類従の「弘対曰、□貧賤之知不可忌」のところを観智院本は「弘対曰。貧賤之知不可忘」とする。又、「大豆進」の項目で、統群書類従の「今□天竺之風」のところは観智院本では、「今案天竺之風」とはつきり判読できる。勿論、統群書類従に判読できない箇所でも、観智院本でも判読できないものがないわけではない。しかし、統群書類従が、観智院本を根拠とするなら、何故、統群書類従に判読できない箇所が観智院本でははつきり判読できるかという疑問を解くことができないと思う。

(五) 観智院本が訂正した箇所を、統群書類従は訂正していない。譬えば、統群書類従の「千金之子不死於市」の項目の「乃掇黄金千溢遺其小子」の「千溢」は、「千鎰」の誤りである。観智院本のこの項目の頭書に訂正があるので、誤りであるこ

とが分る。又、統群書類従の「母愛者子抱」の項目に、「昌治恐不知所為」という所を、観智院本と照合すれば、「昌治」は「呂后」の誤りであることを判断できると考えられる。猶、統群書類従の「大取則大得福」の項目の「惡道以訓天子」は、「惡道以訓天下」の誤りである。観智院本の「天子」の「子」を抹消せずに、その横に「下」と書き付けている。勿論、「天子」が「天下」の誤写であることを、観智院本を写す者は発見していたが、「天子」に対する忌避の気持が働いていたか、「子」を抹消しなかったと考えられる。にも拘らず、統群書類従の編者が「子」の横にある「下」の訂正を見たとすれば、こんな誤りを繰り返さないで済むだろうと考えられる。

(六) 統群書類従の脱落は観智院本より多い。たとえば、「見善如不及」の項目で、観智院本に「論語孔子曰、見善如不及、見不善如揚湯矣、注云揚……」とある部分が統群書類従では脱落している。この他に、一字か二字の脱落や異なる部分が数十箇所もある。譬えば、「仏受猿供養」の項目で、統群書類従に「有一猿猴持仏鉢去」とあるところを、観智院本は、「有一獼猴持仏鉢至」(傍点は筆者、以下同)とする。また、「有靜臣」の項目で、統群書類従は、「孝経曰、昔者天子有靜臣七人。君雖無道不失天下。」とするけれども、観智院本では、「孝経云。子曰昔天子有靜臣七人。君雖(以下脱落)」とする。そして、「堯子不堯」の項目に、統群書類従は、「堯曰、咎若時。登庸。放齊曰。胤子朱啓明。帝曰吁。嚚訟可乎」とするが、観智院本では、「堯云、若時。登庸。放齊曰。胤

子朱啓明。帝曰吁。嚚訟。」とする。このような異なる部分や脱落の部分は枚挙に遑がない。勿論、誤植などの要素も考慮に入れなければならない。しかし、観智院本と統群書類従との間に異なる部分があまりにも多く、統群書類従は、観智院本を根拠としたものではないと考えても宜しいだろうと思う。勿論、観智院本は、現存の唯一の世俗諺文の写本であることは、他の伝写本が発見できないかぎり、これを否定できないけれども、統群書類従の編纂された時代に、他の伝写本も同時に存在していたに違いない。現に、観智院本の訂正や加筆がある事実から見て、異本が存在していた事実を認めざるを得ないと思う。統群書類従の拠った世俗諺文の原本は、送り仮名と訂正を加えた観智院本と別系統のものであると考えられる。しかも、返り点や送り仮名を付していない写本かも知れない。観智院本の冒頭に約三十項目の諺文と賢賀の奥書を、統群書類従が収録していないのも、この事実を物語っているではなからうかと思う。

△注一▽ 古典保存会所収